小学生区分　優秀賞

無意識の偏見を打ち破って

青森県
外ヶ浜町立三厩小学校　六年
笹村　美晴

ある女の子が入学してきました。その子は、一人だけ別の教室で勉強しています。その子が何らかの障がいを抱えているため、別の学級で勉強していることは分かりました。しかし、具体的な障がいの内容や、直面している困難については全く知りませんでした。今思うと、うまく会話ができないと決めつけ、無意識に会話を避けていたように感じています。

このまま特に関わりなく過ごしていくのだろう、そう思っていたある日のことです。その子が、休み時間に話しかけてきました。彼女は、石や木を使って家の家具を作るという遊びをしていました。

「ねえねえ、これ見て。」

その後、会話のラリーが少しだけ続きました。

「これ、何を作ったの。」

「こっちがタンスで、こっちがテーブルだよ。」

「へえ、すごいね。上手だね。」

「ありがとう。」

この会話は、なんてことない会話に思えるかもしれません。しかし、この短い会話が私の心を大きく揺さぶりました。それは、私の心の中に「障がいがあるから会話ができない」という偏見が、無意識に潜んでいたのかもしれないということに気づいたからです。笑顔で一生懸命、出来事を伝えようとしてくれる姿が、私の心をぐさっと刺すようでした。障がいがあってもみんなと一緒なのだと痛感しました。そして、この「無意識の偏見」はあってはならないと考えるようになりました。

私のその考えを、より確かなものにさせた出来事がありました。それは、障がいを抱える彼女に対し、友達が「あの子、みんなと違って変だし、無口だから苦手。」と、陰で話していたのを聞いてしまったことです。とてもショックを受けました。私は彼女の本当の気持ちを知ってもらおうと、必死に彼女の素直さや前向きさを伝えましたが、うまく伝わりませんでした。とても苦しく、泣き出しそうな気持ちになったことを、今でもよく覚えています。しかし同時に、私ははっとしました。友達の今の様子は、以前の私と同じなのかもしれないと感じたからです。無意識に偏見をもっていて、関わろうとしない、歩み寄ろうとしない。そんな状態なのだろうと。

それから私は、偏見を取り除き、みんな一緒に仲良く生活できるようにするために、自分にできることは何かを必死に考えました。その結果、一つの考えが浮かびました。それは、障がいの特性や感じている困難を、まずは自分が正しく理解し、それを周りに伝えることから始めようということです。内面を理解してもらうために、まずは彼女の思いを自分事として考えてもらうところから始めなければと感じたのです。

その後、私は勇気を出して彼女の抱える障がいの特性や困難、そして彼女の努力を一生懸命伝えました。すると、友達は驚いた後、ぼそりと「知らなかった」と呟いたのを見て、やはり私と同じだったのだと改めて感じました。それからは、その友達や周りの子たちが、彼女に優しく声をかけたり、一緒に遊んだりするようになりました。

私は、障がいをもっている人も、そうでない人も、みんな仲良く暮らせる世の中になってほしいと願っています。そんな世の中を実現するには、「無意識の偏見」を打ち破ることが最も大切なのだと思います。そのためには、自分の偏見に気づくことが必要です。私は「偏見に気づいた側」として、無意識の偏見について訴えていきたいです。自分の経験を通じて、少しでも多くの人が偏見を取り除き、みんなが安心して暮らせる社会になっていくことを願い、私は自分にできることを続けていこうと思います。

小学生区分　優秀賞

徳島県

ゆうきをくれる友（とも）

藍住町立藍住南小学校（あいずみみなみ）　五年
田中（たなか）　晋太郎（しんたろう）

ぼくは、みんなみたいに、はなせたら、もっとふれあいができて、たのしいだろうと毎日おもいながら、がっこうへいっています。いつも、いいおもい、うれしいきもち、おもしろいこと、いっしょにたのしめたら、ぼくは空中にうかぶくらい、よろこんでいきます。

ぼくの友だちは、とてもやさしい、ゆいいつむにの友だちです。こまかなことは、いえなくても、いつもぼくのきもちを思い、たすけることをよちしておしえてくれます。たとえば、外国語のじゅぎょうで、ぼくがいいたいことをテレパシーでつうじているかのように、ぼくにかわっていってくれます。なので、ぼくはあんしんして、たのしくじゅぎょうがうけれます。

また、いろいろなばめんで、ぼくがはなせるようにおしえてくれることが、うれしいです。

同きゅう生みんなが、「じぶんだけよければいい。」と思うこはいません。こまったときは、いつもたすけてくれるので、「同きゅう生となら、がんばれる。」し、うつむいてしまいそうなことでも、やってみようと思えます。ぼくは、みんなのやさしさがうれしいので、いつかみんなにはなせるようになりたいです。

「いつもありがとう。」と。

小学生区分　優秀賞

妹の世界を広げたい

岡山県
倉敷市立大高小学校　四年
溝口　桜大

ぼくには双子の妹がいる。ぼくが二歳の時に生まれて、いっしょに大きくなった。今では双子も小学生だ。

自分は勉強も運動も好きだし、とくに仲間とサッカーをしている時が楽しい。友達とゲームや川遊び、鬼ごっこなどのいろんな遊びができるし、四年生の今では、自転車で自由に遊びに行くこともできる。だけど、妹の華央は、小学生になっても言葉が話せない。最近、ようやく食事の時に手づかみをやめてスプーンを使える様になったくらいで、まるで赤ちゃんだ。それに、大きな声で叫ぶし、社会のルールを全く知らないので、お店や公園に一緒に行くことも大変だ。危険なことを平気でしようとするから、お母さんは目がはなせない。夏になると、大好きなプールへ行きたくて毎日水着を着ている。下の水着も頭からかぶって満足そうな顔をしている。思い通りにならない時は、自分の頭をたたいて、それが痛くてさらに泣いて、もう訳が分からない。とにかく華央はできないことばかりで、ダメなことも沢山するし、いつまでたってもお世話が大変だ。

そんな妹の事が、家族は大好きだ。妹はいつもニコニコケラケラよく笑い、見ているだけで面白い。周りにいる家族は妹がいるだけで楽しい気持ちになる。妹がデイサービスでいないと「つまらない」と感じるほどだ。

ぼくや家族にとって、すごく身近な存在の華央だが、ぼくが生きてきた十年間、同じ様な人は見たことがない。学校や公園、図書館にお店、どこに行っても妹に似た人はいない。不思議に思ってお母さんに聞いてみると、どうやら妹みたいな人は日本人口全体で０．１％しかいないらしい。「なんて珍しい人間なんだ」と興奮した。だけど、そんな少数な妹達は、この世界でどうやって生きていくんだろうと不安にも感じた。初めてお母さんと華央について真面目に話をしたら、お母さんの口から「重度知的障害」と「自閉症」という言葉が出た。改めて調べてみると、妹の様に言葉が話せなかったり、かんしゃくを起こしている子の動画を沢山見つけた。ぼくが普通に生活する中では会わなかったけど、それぞれがちゃんと学校へ通ったり、助けてくれる人達と日常を送っていた。ちゃんと存在していて安心したけれど、生活する場所やコースを分けられている様で、さびしいと思った。さらに調べて、新しい言葉を知った。それは「インクルーシブ教育」というものだ。障害の有無などによって分けられることなく、「子供達が共に学ぶ」ということを取り組んでいる大阪の小学校の動画を見たのだ。その小学校では、普通のクラスに、看護師さんが付きっきりの医療ケアが必要な子、重い知的障害の子、発達障害の子も、みんなで一つの教室で過ごしていた。その学校の校長先生は、「支援が必要な人と必要ない人が一しょに学ぶことは、全く特別ではない」と話していた。

ぼくも、自分の家族に華央がいることは当たり前の様に、特別な事だとは思っていないし、これが普通だ。大変な時はみんなで協力するし、兄妹で仲良くしていると、それだけでお母さんやお父さんがゆっくりできる。何より、妹が笑顔になるとぼくは嬉しくなる。だから、障害なんかで分けて暮らすより、みんなで生きる方がずっと楽しいことをみんなに伝えたいと思った。一しょにいるには、工夫や思いやり、自分が障害の有る人に合わせることが必要だ。それは、とても大変なことだけど、ふれ合いで自分も心が温かくなるし、他の誰かが親切にしている姿を見ても、自分のことの様に嬉しくなる。優しさが連鎖して、「どんな人でも同じように生きられる世界になればいいな」とぼくは思います。